

ISSN 2186 – 3989

共生のための社会につながる日本語活動における参加者の意識について

横田 隆志

A Survey of Participants' Awareness in Japanese language activities for coexistence

Takashi YOKOTA

北 陸 大 学 紀 要
第57号(2024年9月)抜刷

共生のための社会につながる日本語活動における参加者の意識について

横田 隆志*

A Survey of Participants' Awareness in Japanese language activities for coexistence

Takashi YOKOTA*

Received July 23, 2024

Accepted August 4, 2024

Abstract

Japanese language education has the potential to contribute to the development of the "power to coexist," as its educational practice to date has been a practice of learning to "live together". In recent years, there has been an increase in reports of practical activities using Japanese in connection with society in Japanese language education. Through these activities, it is understood that learners can connect with society and various learning opportunities arise through these interactions. On the other hand, people other than learners are also involved in such classroom activities. It is expected that there are various changes occurring in the participants involved in the activity through this participation with learners. However, there are few surveys on the consciousness or changes of people who participated in classroom activities, and it is not clear how participants are involved in the classroom activities or what impact these activities have on society.

Therefore, in this study, I focused on participants outside the classroom who were involved in Japanese language classes for international students at a university in Japan and clarified their consciousness and awareness. From the results of the analysis of the interview survey, it was found that those who were involved in the activity gained new realizations that they would not normally be aware of. It suggested that such activities are useful for the participants and have an impact on the realization of a symbiotic society.

キーワード : 共生社会、日本語教育の役割、教室外の参加者、偶然の参加者

はじめに

日本において「多文化共生」ということばは市民権を得てきている。しかしながら、すでに多文化共生社会である日本では多文化共生を目指すとしながら、現実にはそうっていない (山田 2018)。この原因の一つとして、外国人だけが共に生きる努力を求められているという現状がある。共生を目指すならば同じ社会で生活をするみんなが共に生きる社会をどう作っていくべきか考えていく必要がある (門倉・新矢・野山 2010)。

* 北陸大学国際交流センター International Exchange Center, Hokuriku University

日本語教育がこれまでにやってきた教育実践は、「共に生きる」ための学びの実践であり、日本語教育は「共に生きる力」の育成に貢献できる可能性を秘めている(木村・宮崎 2010)。近年、日本語教育では社会とのつながりの中で日本語を使う活動の実践報告が増えてきており、これらの活動を通じ、学習者は社会とつながり、交流の中でさまざまな学びが生まれることが分かっている。一方、そのような活動では教室外の人々もかかわっており、このような参加者にもさまざまな変化が起きているはずである。しかし、教室活動に参加した人の意識やその変化についての調査は少なく、参加者がどのように教室活動にかかわっているのか、その活動が社会にどのような影響を与えるのかについては明らかにされていない。

そこで、本研究では、大学における留学生に対しての社会につながる日本語活動にかかわった教室外の参加者に焦点を当て、気づきや意識について明らかにする。

1. 共生のための社会につながる日本語教育

多文化共生ということばは日常的に見たり、聞いたりすることばとなり、ことばとしての市民権を得てきている。また、日本社会はすでに多文化共生の社会になっており、多文化共生は私たちの周りに当たり前に存在している。しかしながら、多文化共生の意味については多くの人の間で共有できているとは言えない。つまり、多文化社会である日本では多文化共生を目指すとしながら、現実にはそうならないのである(山田 2018)。また、「多文化」を使うことで日本人と外国人の問題であると考えられがちであるが、これは国籍や民族の文化という問題だけではなく、日本で生活をする人々は「日本人」も含め、それぞれが異なるバックグラウンドを持っており、それぞれの人々が共に生きる「共生」社会を日本は目指していく必要がある。このような「共生」社会を作りあげるために日本語教育の役割についても議論され、日本を多文化共生の場にするために日本語教育は重要な役割を果たす可能性があると言われている(日本語教育政策マスタープラン研究会 2010)。また、日本語教育学会でも「人をつなぎ、社会をつくる」をスローガンに共生のための教育を提言していることや「日本語教育学の俯瞰図」の中心にあるものは「ことばと共生」であり、共生社会の実現は日本語教育の使命であると考えられている(日本語教育学会 2017, 2023)。

地域の日本語教育ではこの共生のための日本語教育が一つのキーワードとして日本各地で実施されている。しかし、大学での日本語教育では、まだ個人の日本語能力を向上させることを目的に行われている場合が多いように感じられる。社会にかかわり、つながるような活動は以前より増えているものの、依然として留学生はアカデミックな内容を学ぶ学習者であり、日本語は学問を学ぶための基礎となるものと考えられているのである。そのため、共生社会の実現に大きな役割を果たすことができる日本語教育が大学での日本語教育ではあまり役割を果たしていないという現実がある。大学での日本語教育では、教室での活動が主になり、教室外とのかかわりや社会を取り込みながらの活動が少なく、共生のための日本語教育という観点から考察すると課題があることが分かる。共生のための大学における日本語教育としては、教室外の人参加して活動をする必要がある。

ただ、近年、日本での日本語教育では、教育の目的や内容についての変化も見られる。日本社会の外国人の増加や日本語学習者の多様化が進んだことにより、日本語教育の目的も個人の言語能力の習得やその向上から日本語教育を通じて社会の課題の解決へと変化しつつある。また、学習者は「よそ者」や「日本語を学ぶ人」としてではなく、日本社会で生活をする社会的成員として捉えられるようになってきている(文化庁 2021)。そのため、教師の役割も日本語ができない学習者に日本語を教えるということよりも学習者が日本社

会で生活をする上で自律的に学習に取り組むことができるようにサポートすることと考えられるようになってきた。日本語の学習は、ただ単に「日本人」と交流し、そこでのコミュニケーションの能力を高めるといったコミュニケーション中心の教育から社会文化的アプローチに則って行われるようになってきている。そのため、日本語教育は「ことばによって活動する」場をつくること（細川 2016）であり、言語そのものの教育だけではなく、内容に焦点を当てた実践やその報告も見られるようになってきている。このような背景から「個人は他者とともにあり、この社会において他者とともに生きるという課題を解決するために、ことばの教育に何ができるかという問い」（細川 2022：17）を自己、他者、社会から考察し、学習者主体の活動型の日本語教育の重要性も指摘されている。また、このような理念からの日本語活動で社会とのかかわりや社会への参加を目指し、社会とのかかわりやつながりの中で日本語を学ぶ活動も増えてきている（佐藤・熊谷 2011, 當作 2013, トムソン 2016）。従来は教室の中だけで行われていた日本語教育が「内容」にも焦点を当て、教室外の人々ともつながる活動が増えている。しかしながら、このような社会につながる日本語教育にも、いくつか問題があることも明らかになっている。このような活動では、「社会とつながる」ことが目標とされているが、どのように社会につながるかなどの実践研究はまだ十分ではない。

共生のための日本語教育は、他者と共にある社会でことばを使って共に学ぶ場を創る活動であると考えることができる。そこでは、学習者だけではなく、教室活動にかかわる人々も学習者とかかわる過程において何らかの気づきや学びがあるはずである。しかし、日本語教育において教室外のコミュニティを扱う研究は限定的で（嶋 2015）、日本語教育は学習者だけが学習するものであると考えられている場合が多い（野々口 2010）、教室活動にかかわった学習者以外の参加者に焦点を当てて調査しているものは少ない。そのため、学習者はどのように社会にかかわり、どのようなことを考えているのかといった調査はあるが、教室外の参加者の意識の調査はあまり多くない。参加者は教室活動にどのような意識で参加しているのか、また、参加することでどのような意識の変化が生まれるのかを明らかにすることで大学での日本語教育も共生のための日本語活動となる可能性があることを探ることができる。

2. 社会につながる日本語教育の実践

2022 年の秋学期に筆者の所属大学である北陸大学において「社会につながる日本語教育」を編入留学生 4 年生に対しての日本語科目で実施した。受講者は 15 名で、全て中国からの留学生であった。日本語のレベルは、N1 合格者 6 名、N2 合格者 5 名と比較的高いクラスだった。授業の目的は、学習者が学習者自身が所属するコミュニティに積極的に関わり、同じコミュニティに所属する人々との協働を通じてより良いコミュニティになるためにはどうしたらいいかを考えることであった。そのため、教室活動には所属大学がある石川県で生活をしているさまざまな人も参加者として授業に参加した。具体的には、市役所の職員、不動産会社の社員、主婦、地域日本語教育関係者、大学生、外国人住民など 12 名が教室活動にかかわった。

教室活動では、まず、グループワークを中心に、所属大学、金沢市について調査し、それぞれの問題を発見する活動を行った（表 1）。そして、それらの問題をどのように解決したらいいかを考え、それを提言という形にまとめる活動を行った。毎回の活動は、「グループでの話し合いの活動」、「考えたことをまとめる活動」、「参加者のフィードバックから考える活動」の 3 つの部分から成り立っていた。授業の中でのグループワークでは、毎回のテーマに沿って 3～4 人のグループで話し合いをし、授業時間でのグループワークで話し

たことや考えたことをまとめて Padlet¹ に記録した。そして、教室外の参加者は学習者が Padlet にまとめたものを次の授業までに読み、それに対して自由にコメントをした。このように学習者と参加者はオンラインでのやり取りのみで対話を行った。その後、学習者は授業時間内や授業時間外にそのコメントを見て、授業ではコメントを参考にしながら更に問題や提案について考えた。そして、考えたことを再度グループで話をするという活動を行った。このような教室内でのグループでの対話、教室外での参加者との対話を通じて学習者は自分自身が考える問題をより具体化し、問題の改善策についても何度も考察した。教室内でのこのような話し合いは、グループで行うがグループ単位で提言をする活動ではなく、学習者はそれぞれ個人でテーマを決め、そのテーマについてグループで毎回話し合いをした。そして、学習者は解決策を PowerPoint にまとめ、それぞれのコミュニティに向けてプレゼンテーションを行った。大学への提案では、大学のカフェテリアで、金沢市への提言では県立図書館のオープンスペースで、その場にいる人々に向かって提言を発表した²。彼らは、教室活動に意図的に参加した人ではなく、たまたま大学のカフェテリアや県立図書館にいて、学習者の発表を聞いた「偶然の参加者」である。今回はこのような参加者も社会につながる日本語教育の参加者として捉え、活動を実施した（図 1）。

表 1 活動内容

| | |
|----|--------------------------|
| 1 | 大学について考える（グループワーク） |
| 2 | よりよい大学にするためには（グループワーク） |
| 3 | 大学への提案を考える①（個人・グループワーク） |
| 4 | 大学への提案を考える②（個人・グループワーク） |
| 5 | 大学への提案（プレゼンテーション） |
| 6 | 振り返り①（個人・グループワーク） |
| 7 | 振り返り②（個人・担当教員とのインタビュー） |
| 8 | 金沢のイメージについて（グループワーク） |
| 9 | 金沢市について考える（グループワーク） |
| 10 | 金沢市の問題（グループワーク） |
| 11 | 金沢市への提案を考える①（個人・グループワーク） |
| 12 | 金沢市への提案を考える②（個人・グループワーク） |
| 13 | 金沢市への提案（プレゼンテーション） |
| 14 | 振り返り①（個人・グループワーク） |
| 15 | 振り返り②（個人・担当教員とのインタビュー） |

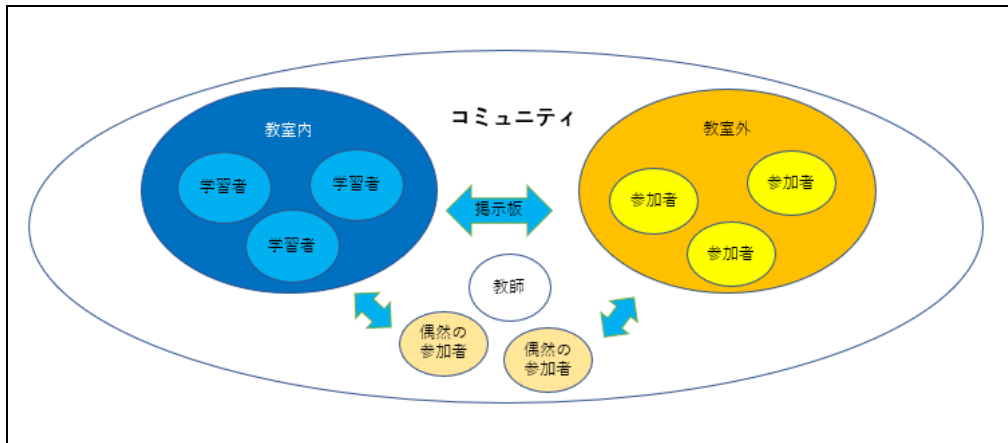


図 1 活動のイメージ

3. 参加者の意識とその変化

3.1 調査方法と分析

教室外の参加者の意識については、横田（2023）がオンラインで実施した社会につながる日本語活動での参加者に対してインタビュー調査を行い、明らかにしている。教室外の参加者は、自文化の再発見の機会を得たり、多様性の発見につながったりしている。教室外の参加者はこのように活動に参加することで多くの気づきを得ている。つまり、活動に参加する人は、活動に協力するボランティアとして一方的に学習者を支援する役割だけではなく、活動に参加することによって新しい発見をする機会や当たり前のことを再考する機会を得ているのである。そして、このような活動にオンラインで参加することは、教室外の参加者にとっては時間的な制約や空間的な制約がなく、参加することが日常生活の負担になることはないことが分かっている。しかし、オンラインでの交流では、交流をしている学習者を個人として捉えることが難しいという指摘もある。

横田（2023）の調査では参加者の活動後の意識の調査にとどまっている。そこで、今回の調査では、活動におけるどのようななかかわりが新しい気づきを得ることにつながったのか、具体的にどのような活動が意識の変化につながったのかについて活動のプロセスにおける意識の調査も実施する。また、積極的に活動に参加した参加者に対する調査はあったが、活動にあまり参加していない参加者の意識については明らかにされていない。そこで、今回は教室活動にオンラインで直接参加した「実践協力者」である教室外の参加者にインタビューを実施した。教室外の参加者を「毎回の活動で掲示板にコメントを書いていた参加者」、「時々コメントを書いていた参加者」、「あまりコメントを書いていなかった参加者」、「コメントを書かなかった参加」に分類し、活動に積極的に参加していた参加者（2名）と活動に積極的に参加していなかった参加者（2名）にインタビューを行った。また、教室活動には直接参加はしていなかったが、学習者の発表を聞いていた「偶然の参加者」（3名）にもインタビューを行った。

インタビューは半構造化インタビューで、活動に参加して感じたこと、活動に参加して気づいたこと、どうして活動に積極的にかかわったのか、積極的にかかわらなかったのか、活動に参加したことで変化したことなどについて質問をした。インタビューは調査協力者

の許可を得て録音し、文字化し、スクリプトを作成した。今回の調査では、ナラティブに注目し、分析を行った。

3.2 実践協力者としての参加者の意識

積極的な参加者① Yさん

Yさんは金沢市内の不動産会社に勤務している。業務上、留学生とかかわることがあり、留学生に対して興味を持っている。また、会社には外国人スタッフも在籍しているので普段から外国人とかかわることは多い。活動では、毎回、留学生の書いたものにコメントしていた。

Yさんの意識やその変化としては、「留学生やその国への興味」、「やさしい日本語の意識」、「外国人への配慮」などがあったことが分かった。

留学生やその国への興味

「旅行に行っていないんだけど向こうに行って何かこう現地の発見をするのを別に行かなくても何かこうして一部だけでも知ることができたということなんですかね。」

「彼らが暮らしてきた状態、暮らしぶりみたいなものを知ることによってその人たちのことを知ることですかね。彼らって、ある環境のもとにいたからこういう発言とか考えとか持っているんだよね。」

Yさんはこの活動を通じて、実際には中国に行ったことはないが、中国のことを知ることができたと感じている。これは、学習者が考えた金沢の問題を見ることで、どのようなことを中国と比較しているかが分かったからである。また、学習者の問題意識は彼らのこれまでの生活の背景から生まれるものであり、活動に参加したことでそれを知ることができたと感じている。そして、そのような背景が分かることでその人物についても理解することができると考えるようになった。Yさんはこのようなことを考え、留学生や留學生の出身の国に興味が出てきた。

やさしい日本語の意識

「なんかこう苦労したのは、これちょっと分かりづらかったなみたいな感じで。分かりにくいところはなかったんですけどこちらとしたら多分日本語はできるだけ知っている言葉で間違いなく伝わるように書かなきゃなっていうことに気をつけてはいました。」

「みなさんから見てどうだったかわかんないし相手から見てどうだったかちょっとわからないですけど私の中ではできるだけそれを心がけていました。」

Yさんは掲示板への書き込みからだけでは学習者が本当に意図することを理解することが難しかったと感じている。ただ、表現としては学習者が伝えたいと思っていたことはきちんと伝えられていたと思っている。また、自分自身が書く日本語については自分の意見がきちんと伝わることに気をつけていた。そのために相手のことを考えながら一つ一つの表現やことばについても伝達することができるかを考えながら使用していた。ただ、それが本当に相手に理解されていたのかどうかは分からない。

外国人への配慮

「社員さんで海外から来ている人たちがいます。普段は日本の社会に慣れるように話したりしているんですが、彼らに対してちょっと優しくなったとかっていうのがありました。」

Yさんの会社には外国人スタッフがいて日々交流がある。日本の社会に適応するように指導することもあるが、このような活動を通じて、日本社会が外国人にとって不便なところがあるということに気づいた。そのような大変な環境で日々を過ごしている外国人に対して親切に対応する気持ちが生まれた。

Yさんはこの活動を通じて、留学生やその国への興味がわき、コミュニケーションにおける自分が使うことばや表現についても気をつけていたことが分かった。これが「やさしい日本語」を使おうという意識になっている。また、自分自身が毎日接している外国人スタッフに対しては日本に慣れることが大切と考えていた。しかし、日本社会の問題についての発見もあり、それまで自分自身が当たり前と感じていたことも外国人スタッフにはそうではないことに気づき、会社で働く外国人にも少しやさしくなったと感じている。そして、インタビューでは「日本人の社員の研修とかでこういうのは使えそうです。」という発言もあり、会社での研修でもこのような活動に参加することは他の人に対してやさしくなれるという意義があると考えているようであった。

Yさんは、日常的に外国人と接する機会があったことから留学生とも積極的に関わり、それによって新しい気づきもあったことが分かった。そして、その気づきによって普段から接している外国人に対してのかかわりの意識についての変化も見られた。

積極的な参加者② Fさん

Fさんは金沢市に住んでいて、ボランティアで日本語を教える活動を行っている。定期的な仕事はしていないが、日本語教育に興味があり、将来は日本語教育にかかわりたいと考えている。活動には積極的に参加し、毎回、すべての留学生にコメントしていた。参加者の中でも一番留学生にかかわっていた人である。

Fさんは活動を通じて「日本の再発見」、「多様性の発見」などについて気づいていたことが明らかになった。

日本の再発見

「自分たちが置かれてる状況が当たり前で、そういうことに対して問題提起というかそっちに頭が回らないというのはあります。」

「私はもうしょうがないかなみたいなふうに思ってしまうので、留学生がそういうふうに思ってるんだっていうのは思いました。なんか新しい発見ですよ。」

「実は大きな問題なんですよ。」

Fさんは自分たちが当然と思っていることは外国人にはそうではないことに気がついた。ある程度不便さを感じていてもそれが外国人にとって大きな問題であるということを認識していなかった。また、それらの問題は実際は「日本人」にとっても大きな問題であると考えようになった。このように活動を通じて日本社会が抱えている問題について改めて発見した。

多様性の発見

「日本人としてひとくくりで思ってたけどもいろんな日本人がいて。」

「私こういう仕事に就いているのに外国人の人を一括りでどっか頭は考えてるなあっていうのを感じました。」

Fさんは掲示板でのやり取りでの同じ参加者の日本人との意見の違いを体験し、日本人の中にも多様性があることに気づいた。また、自分の意見が日本人の代表ではなく、それぞれの日本人にはそれぞれの考えがあると感じるようになった。また、普段から外国人と接する機会はあるのに、それぞれの外国人を個として捉えていなかったということにも気づいた。頭では理解していたつもりでも外国人をステレオタイプから見ていることがあると考えている。

Fさんはこれまで自分たちが置かれている状況は当たり前のことで、あまり問題とは感じていなかった。しかし、この活動を通じて、このようなことはよく考えると問題であるということを感じるようになった。普段は自分の生活とかかわりのないようなことは気にしないで生活をしているが、日本には自分が知らない、感じない問題が多いことにも気づいた。また、日本人同士でのやりとりでの意見の違いから日本人だからみんな同じ意見であるとは限らないことについて気づいた。これは外国人についても同じで、それぞれが個人で考えは違うということを改めて感じていた。このような体験から留学生の交流活動は市民向けのイベントとしても面白いと考えている。

Fさんは日常的に外国人とかかわる際にステレオタイプとしてその人たちを見ないようにはしていたが、この活動を通じて知らない間にステレオタイプから外国人を見ていたことに気づいたようである。また、この活動に参加したことはこれからの生活においても役に立つと感じている。そして、この活動が外国人に興味がない人にも参加できるようにするとより良い社会になると考えていることも明らかになった。

消極的な参加者① Kさん

Kさんは市の職員である。外国人とかかわることはあまりなかったが、国際交流課に配属され、仕事の上で外国人とかかわるようになった。しかし、どのようにかかわったらいいかを模索中である。外国人との交流活動に参加することでかかわりかたを見つけようと思い、教室活動に参加した。しかし、コメントを書くことはあまりなく、交流活動に関しては消極的であった。

Kさんへのインタビューを通じて、「留学生への興味」、「交流の意識」、「日本の再発見」などの意識が生まれたことが分かった。

留学生への興味

「はい、毎回案内があるときは見てました。留学生が考えることは結構面白いアイディアがありますね。」

「活動ではコメントをすることはあまりなかったんですけど、留学生が考える日本の問題については興味深く見ていました。」

Kさんは活動ではコメントを書かなかったが、毎回学生が書いたコメントは見ていた。また、留学生がコメントしていたものに対してはアイディアとして興味があり、それが面

白いのでコメントを見ていた。コメントを書くという参加ではなく、コメントを見るという形で活動には参加していた。その理由としては、留学生の観点の面白さがあったからである。留学生の観点に関しては興味を持っていた。

交流の意識

「私なんかがコメントしていいのかなと。学生さんが一生懸命考えたものだから。」

「正しい答えを教えるのは難しい内容だったし、私は一般の人だから専門的なことは言えないかなと。」

「意見を見るのは面白いし、学生さんとも話をしてみたいですね。話すのならできそうですし。新しい考えを聞くのは結構好きなんですよ。」

Kさんはコメントをする際には「正しいこと」や「学生に価値があること」を書かなくてはならないと思い、コメントをすることはなかった。また、専門的に回答しなくてはと考えて、なかなかコメントをすることができなかった。ただ、学生の意見については興味があり、実際に会って話をするのはできそうだと感じている。交流に関して消極的であったわけではなく、文字を使ったフィードバックに対して消極的だっただけである。

日本の再発見

「留学生が自分の視点とは違う視点から日本社会を見てて、新しい日本があるような感じがしました。」

「悪いこともずっと住んでると気がつかないんですね。留学生は本当に困っているんだなと思いました。」

Kさんは留学生の意見を見ていて日本人とは違う観点から日本を見ている気がした。それはKさんにとって新鮮なものであり、自分自身が知っている日本とは異なることに気づいた。また、日本で生まれ、日本で生活していると気がつかないことがあることにも気づいた。それは本当は日本人にとっても不便なことであるが、それを意識しないくらい当然のこととしている。また、その不便なことは日本にいる外国人にとっては非常に不便なものであり、困っているということも感じていた。

Kさんは活動ではコメントをすることはあまりなかったが、留学生が考える日本の問題については興味深く見ていたことが分かった。留学生は自分の視点とは違う視点から日本社会を捉えていて、新しい日本があるように感じていた。また、このような外国人の視点からの意見を知ることは面白いと考えている。コメントをしなかったのは、学生が考えたことにコメントするのは失礼かなと思ったからであったようである。また、正しい答えを書くことや専門的な回答ができないと思ったためにコメントをしなかった。これはコメントをすることに慣れていないからであろう。コメントではなく、実際に話をするならできそうな気がする」と述べている。

Kさんのインタビューからは活動には消極的だったが、実際はこの活動を通じて、さまざまな気づきが生まれていたことが分かった。たとえ活動には消極的であったとしても活動に参加することで意識の変化や新たな意識が生まれていることが明らかになった。

消極的な参加者② Tさん

Tさんは市の国際交流課の職員である。中国出身で、長い間、日本で生活している。仕事では多くの外国人にかかわり、日本についても外からの視点で見ることができる。留学の経験はないが、中国では日本語を学んでいた。活動ではコメントを書くことはなかったが、学生が書いていたコメントは毎回読んでいた。

Tさんはこの活動を通じて、「留学生の意見についての共感」、「多様性の発見」、「意見を伝えることの需要さ」、「発言の安全性」などの意識が生まれたことが分かった。

留学生の意見についての共感

「同じ外国人なので「そうですね」という気持ちで。」

「バスの不便さとか買い物のQRコードとかですね。やっぱり不便なんだって。」

Tさんも留学生と同じ観点で日本社会を見ており、共感する部分が多かった。便利なものよりも不便に感じることは共感することが多かった。そのため、留学生が日本で生活する際に不便と感じていることも理解することができ、留学生の大変さも分かっている。

多様性の発見

「若い人とは感覚が違うものもあるのかなと感じました。同じ国の人でも意見は違いますね。」

「日本人でも意見が合う人はいますし、中国人でも意見が合わない人がいます。人はそれぞれなので、国が重要ではないですね。」

「自分も日本で生活をしているので知らない間に考えが変化していることもあるかもしれません。」

Tさんは日本の不便さに関しては留学生と共感する部分もあるが、異なる考えもあることに気づいた。同じ国の出身だからみんな同じ考えを持っているわけではなく、個人によって考え方は違うと考えている。その原因は同じ国だからではなく、年齢の違いであると考えている。さらに国籍というバックグラウンドだけでなく、違う国籍の人でも考えが似ている人はいて、個人によって考えが異なるということについて気づいた。そして、自分自身の考えも変化している可能性もあるかもしれないと感じている。

意見を伝えることの重要さ

「外国人が話をしても聞いてくれないのかなと。でも、学生の意見を見ていると伝えることはいいなと思いました。」

「意見を伝えることは大切だなと思いました。それで日本の人が気づいて、変化したら日本での生活がやすくなります。」

Tさんは日本では「外の人」と思っているため、外国人が日本のことについて話をしても誰も聞いてもらえないと思っていた。日本についても意見はあるが、それを誰かに伝えることは今まであまりしてこなかった。しかし、留学生が自由に意見を述べている様子を見て、自分の意見を伝えることは非常に大切なことであると感じるようになった。また、

外国人が外国人の視点から発言することで日本の社会がよくなる可能性があることにも気づいた。

発言の安全性

「私ならあきらめてしまうところです。日本で不便だなと思ってあまり言わないですね。ただ家では家族で「どうしてなの」と言っていますが。いろいろな考えの人もいますし。自分では考えないこともあります。」

「怒られたら嫌ですから。留学生に。」

「怒られなかったら自由に書いてみたいですね。」

Tさんがコメントをしなかったのは、発言に関して安全性が保障されていないからであった。留学生にコメントをしたら留学生が不快に思うのではないかという気持ちもあった。自分が意見をする事で怒られるなら発言しないほうが良いと思っていた。ただ、家族間ではそのような不安がないために自分の意見を言うことはある。自分の意見を伝えることは嫌いではないので、発言に関する安全性が保障されるなら自分の意見を伝えたいと思うようになった。

Tさんはこの活動を通じて、日本に対して留学生と同じような観点から問題があると感じていた。ただ、同じ中国人でも考えが違うこともあり、同じ国の人でも年代や生活の背景が違ふと考えが違ふということにも気がついたことが分かった。Tさんは、普段から自分の意見を他者に言うことはあまりしない。これは、自分は日本では外国人であり、誰も自分の意見を聞いてくれないと思っていたからである。しかし、留学生の主張を見るうちに、自分の意見を他者に伝えることの大切さについて気がついた。ただ、発言をすることに対しては安全性が保障されていないためにコメントすることが苦手なことが分かった。

TさんもKさんと同様に活動には積極的に参加していなかったが、この活動を通じて、考えたことや意識の変化があったことが分かった。参加の方法が積極的か消極的かということよりも活動を通じてどのような変化があったのかを調査することが重要であることが明らかになった。

3.3 偶然の参加者の意識

偶然の参加者①（大学のカフェテリア） Sさん

Sさんは大学3年生である。専門は英語なのであまり中国人留学生とかかわることはない。大学に留学生がいることは知っているが、授業でも留学生と一緒にいる機会は少ないので話をしたこともなかった。

食事をしている時に留学生の発表を偶然聞き、その発表を聞くことで「留学生の日本語や発表の能力」の高さについて知ることができた。また、そのような発見を通じて「留学生への興味」が生まれたことが明らかになった。

偶然の参加

「イベントがあることは知らなかったです。で、食事をしていたら突然イベントが始まって、最初は特に聞こうとは思わなかったんですけど、自然に耳に入ってきた感じですね。」

「ちょっとびっくりしましたが、聞いてたら面白かったです。」

Sさんはいつもどおりカフェテリアで食事をしていたところ、そこで留学生の発表が始まった。普段はこのようなイベントはないので驚いた。ただ、そのイベントには興味がなかったのだから聞くことはなかった。しかし、一人で食事をしていたので自然と留学生の発表が耳に入ってきた。イベントに参加する意欲はなかったが、話を聞くうちに留学生の意見は面白いと感じるようになった。

留学生の日本語や発表の能力

「留学生の日本語の能力が高いと感じました。」

「内容についてもレベルが高いと感じました。調査をしてそれを日本語で発表することはとてもすごいと思いました。英語のプレゼンではいつもあまりうまくいかないのです。」

Sさんは普段は交流のない留学生の日本語能力が高いことに気がついた。留学生の日本語能力について考えることはなく、どのくらい日本語が話せるのかも知らなかった。また、発表の内容についてもレベルが高いと感じた。自分自身が英語でのプレゼンテーションで苦労しているので留学生が苦労していることも発表のレベルが高いのも分かる。

留学生への興味

「どうしたら外国語が上手になるか話してみたいと思いました。」

「普段は留学生と交流はないですね。でも、日本語が上手なら話しかけてみたいです。」

Sさんは発表を聞いているうちに留学生に対する興味が湧いてきた。同じ外国語学習者としてどのような学習ストラテジーを持っているかに興味を持った。また、日本語能力が高いことが分かり、自分が話す日本語でも交流できる可能性があることに気づいた。普段は交流がない留学生と交流してもいいかなという気持ちが生まれた。

Sさんはイベントがあることは知らなかった。そして、カフェテリアで食事をしていたら突然イベントが始まったことに驚いたようである。最初は発表には興味がなく、特に聞こうとは思わなかったが、発表が自然と耳に入ってきたことで意識しないで参加したことが分かった。そして、発表を聞くことで留学生の日本語の能力が高いと感じた。また、発表の内容についてもレベルが高いことに気づいたようである。そして、どうしたら外国が上手になるか、学習方法はどのようなものかを考えた。

Sさんは偶然の参加により、留学生の日本語や発表のレベルの高さについて知ることができた。そこから、日本語の学習法について興味を持ち、交流の意識が出てきたことが分かった。普段は外国人に興味がない人もこのような形での参加は可能であり、短い時間でもさまざまな気づきが生まれることが分かった。

偶然の参加者②（大学のカフェテリア） Kさん

Kさんは大学4年生である。専門は英語で、普段留学生と交流する機会はない。大学内では留学生を見かけるが、特に交流しようと思ったことはない。同じ大学にいるが接点もないので、留学生がどのくらい日本語が話せるかも知らなかった。

偶然イベントに参加したことで、「日本の再発見」、「活動への興味」などの意識が生まれたことが明らかになった。

偶然の参加

「イベントがあるのは掲示板で知っていました。でも、そんなに興味はなかったです。今日もただ友だちとお昼ご飯を食べていただけです。」

「友だちと留学生の発表していたテーマについて話しました。意外と同じようなことを考えているなど。」

Kさんはいつも友だちと一緒にカフェテリアでお昼ご飯を食べている。この日も普段と同じようにお昼ご飯を食べていたらイベントが始まったので驚いた。席を移動してくださいという案内がなかったのでそのまま食事を続けていた。また、イベントがあることは知っていたが興味はなかったので参加する予定はなかった。参加しているという意識はなかったが、留学生の発表が聞こえてきたのでそのまま聞いていた。面白そうなテーマのものは友だちとそのテーマについて話をした。留学生が提案することと普段自分たちが考えていることが同じだと感じた。

日本の再発見

「結構、留学生の発想はおもしろいですね。ロッカーがあるのは大学に荷物を持ってこなくていいし、便利かな。でも全員分は難しいと思いました。」

「普段当たり前と思っていることが留学生には問題なんですよ。」

「普段は気がつかない大学の問題について話を聞いていると問題があると思った。普段はそのようなことを考えないので新鮮な気持ちになった。」

Kさんは留学生の発表を聞き、興味を持った。その発想はそれまでの自分にはなかったが、その発想は学生みんなにとって便利なものであるということに気づいた。また、留学生の観点は自分の観点とは異なり、自分たちは当たり前と思っているが留学生にとっては違うということにも気づいた。さらに、発表を聞くことで、大学の問題を考える機会を得て、そこから新しいアイデアも生まれることに気づいた。

活動への興味

「聞いていて面白かったので、今度はきちんと参加したいです。」

「内容も、留学生に質問できたらいいなと思いました。」

「留学生のプレゼン能力が高いなと友だちと話をしました。」

Kさんは留学生の発表を聞くことで、このようなイベントがあれば参加したいと感じるようになった。また、ただ単に聞くということだけではなく、内容についても興味を持ったので、留学生の主張に対して質問をしたいと感じた。これは、プレゼンテーションの方法が分かりやすかったこともその理由の一つである。そして、このような活動で友だちとの新しい対話が生まれることにも気づいた。

Kさんはイベントがあることは知っていたが、興味はなかった。しかし、偶然に発表の場にいたことでイベントを聞き、その内容について考え、友だちとその内容について話をし、参加していたことが分かった。そして、留学生の日本語のレベルとプレゼンテーションの能力の高さに驚くと同時に普段は気がつかない大学の問題があることに気づいた。そして、普段はそのようなことを考えることや、そのようなテーマでは友だちと話をしないので新鮮な気持ちになったようである。このような参加を通じて、留学生のイベントは面白いと思い、次回は進んで参加したいと思うようになったことが分かった。

Kさんも偶然イベントに参加したが、その参加によって新たな発見ができたようである。日常では考えることのなかったことを考えるきっかけになり、自分自身の大学について考えるようになった。また、留学生の日本語力やプレゼンテーションのうまさに興味を持ち、イベントにも積極的に参加したいと思うような意識が現れたことが明らかになった。

偶然の参加者③（図書館）Iさん

Iさんは会社員で休日に図書館に本を借りに来ていた。普段の生活では外国人とかかわる機会はほぼなく、コンビニで外国人の店員とのやり取りをするくらいである。金沢市で生まれ、子どものころから大人になるまで金沢で生活をしている。

インタビューの分析からIさんは「外国人への意識」、「留学生の日本語能力」、「留学生の視点」、「日本の再発見」、「外国人への興味」などについて考えていたことが分かった。

偶然の参加

「図書館に本を借りに来たらイベントをしていたので参加しました。特に予定もなく、何も考えずに会場に入ってみました。」

「最初は入ろうか悩んだんですが、オープンスペースだったから入りやすかったです。」

Iさんは休日を利用し、図書館に来ていた。イベントがあることは知らなかったがオープンスペースでの活動ということと「ご自由にお入りください」という掲示があったので会場に入った。閉じられた空間ではなく、誰でも入ることができる場所だったのとほかの人がいたので入った。特に外国人が主張することに興味があったわけではなかった。

外国人への意識

「普段は外国人と交流する機会はないんですけど、最近、外国人が増えたなと思いました。コンビニとかにはいますよね。」

「顔というか外見で分かる人もいるし、名札を見ると日本人じゃないなと。」

「話す機会はないです。話そうとも思わないですね。」

Iさんは普段の生活では外国人とかかわることはない。買い物をするときにお店の店員が外国人なのを名札を見て知った。そして、最近、そのような外国人が増えたことには気づいていた。しかし、買い物のやり取り以外で交流する機会もなく、交流しようと思ったこともなかった。

留学生の日本語能力

「外国人の話す日本語ってあまり分からない感じでした。でも、そのイメージとは違って、留学生の日本語が上手なのはとても驚きました。うまいですね。」

「外国人は日本語を勉強するのは難しいのかなと。長く住んでいても話せないと思っていました。でも、話せる人もいますよね。」

Iさんは留学生の発表を聞いて、留学生の話す日本語が上手なので驚いた。日本語は外国人にとっては難しい言語で、習得するのは時間がかかると思っていた。しかし、留学生はかなり自由に日本語を使い、それぞれの主張をしていたことから外国人でも日本語を上手に使える人も多いことに気づいた。

留学生の視点

「学生さんが提案していたのは、便利だと思うし、外国人には不便なのかなと思います。」

「外国人だからその発想ができるのかなと思いました。」

Iさんは留学生の提言を聞いて納得することも多かった。金沢市への提言は金沢に住む人にとっても便利なことに気づいた。また、その発想は自分と異なる視点で、違う国で生活をしたことがあるから生まれると感じていた。

日本の再発見

「金沢で生まれて、金沢で育ったのでいろいろなことに気がつかないですね。金沢のいろいろなことが当たり前で、問題だとは思わないです。特に雪に関しては」

「外国人だからの視点でしょうかね。僕たちはあんまり気にしないことが多いですね。でも、よく考えるとそうだなと。同じ名前のバス停が違う場所にあるのは不便ですね。」

「新しい視点からの提案で非常に興味深く感じました。それになるほどと思うのも多かったですね。」

Iさんは小さいころから金沢で育ったために金沢にあるものは当然であるという意識だった。自分自身はそのようなことを問題だと思ったことはなかった。しかし、留学生に指摘されたことで気がついたこともあった。当たり前のことと思っていたが、話を聞くと実は不便なことかなと思うようになった。自分の視点とは異なる視点からの意見は面白いと感じた。

外国人への興味

「話を聞いている間にもっといろいろなことを聞いてみたいと思いました。日本語が上手だから学生さんとも話をしてみたいと思います。」

「コンビニで働いている人も日本語が上手なのかもしれませんね。今度、話してみようかなと思いました。突然話しかけたらびっくりするかな。」

Iさんは普段の生活では外国人と話をする機会はないが、発表を聞いているうちに質問したいと思うようになった。また、それは留学生の話す日本語が上手なので自分が話すことを理解してくれるからというものもあった。普段の生活で見かける外国人の店員とも話をすることができるかなと考えるようにもなった。

Iさんは図書館に本を借りに来たらイベントをしていたので、特に予定もなく、何も考えずに会場に入ろうと思い、活動に参加したようである。また、オープンスペースのため、参加しやすかったことが偶然の参加につながったことが分かった。普段は外国人と交流する機会はないが、外国人が増えたことには気づいていたようである。ただ、外国人はあまり日本語を話せないというイメージを持っていたので、留学生が話す日本語が上手で自分のイメージとは違ったことに驚いた。Iさんは金沢で生まれ育ったためにいろいろなことが当たり前であり、問題に気づくことはなかったが、留学生の発表を聞いて新しい気づきがあった。そのため、留学生が提案することも新しい視点からの提案で非常に興味深く感じ、その内容にも納得したようである。更には、外国人とも話をしてみたいと思うようになり、交流の意識も生まれたことが分かった。

Iさんは偶然イベントに参加したことで、外国人に対する意識の変化や自分自身が考えていたことについても再考する機会を得ていたことが分かった。このように興味がない人も偶然に参加することで参加した活動からさまざまな気づきが生まれることが明らかになった。

おわりに

本研究では、日本の大学における留学生に対しての日本語の授業にかかわった教室外の参加者に焦点を当て、気づきや意識について明らかにした。この活動にかかわった人々はどのような気づきがあったのか、どのような意識の変化があったのかがインタビュー調査の分析の結果から明らかになった。教室外の参加者はこの活動にかかわったことで普段は意識することのない新しい気づきを得ていたのである。

活動に直接参加していた教室外の人々は、基本的に外国人について興味があり、外国人に対しても好感的な意識を持っていたことが明らかになった。しかしながら、無意識のうちに外国人に抱いていたイメージがあり、それがステレオタイプを生んでいたようである。活動に積極的に参加することでさらに外国人に対しての理解が深まり、それが今後の外国人とのかかわり方にもよい影響を与える可能性がある意識の変化があったことが分かった。また、外国人とのかかわりから自分自身のことや日本人の多様性について考えるきっかけになったことがインタビューの分析からも分かる。

積極的に参加していなかった教室外の参加者のインタビューの分析からは活動には積極的にかかわっていなかったが、実際には外国人について考える機会にはなっていたことが分かった。今回の活動では、対面での交流ではないことから交流することやコメントを

書くことに抵抗があり、積極的に交流ができなかったようである。活動に参加することで参加者には意識の変化や気づきが見られたということは、この活動は消極的な参加であっても外国人についてや日本について十分考える機会になりえるということである。

参加の方法については、協力をして参加する「決められた参加者」以外の「偶然的参加者」もイベントにかかわることによって気づきがあったり、新たな意識が生まれたりする可能性があることが示唆された。自分自身が興味を持ち、それにかかわる人々は新しい気づきをえやすいだろう。外国人に興味がある人は外国人に対してもやさしくなれることは想像しやすい。しかし、外国人に興味がない人も活動に巻き込んでいくことで外国人について考え、そこから多様性についてや日本について考え直すきっかけになるだろう。

また、参加者の意識では、教室活動で直接交流していた参加者は、「日本についての再考」の意識があったことが分かった。普段の生活で当たり前のものと考えていることに問題があると認識することは難しい。留学生との交流では、留学生が考える問題が見えることや留学生からの視点で日本を考えることができるために、日本についてもう一度考える機会が生まれやすい。このような外国人にとっての問題は実際には日本で生まれ、日本で生活をしている「日本人」にとっても問題の場合が多い。このような問題を再認識できたことは参加者にとっては有益なことであると考えられる。また、掲示板でのやりとりを通じて「外国人」「日本人」という枠組みを越えたそれぞれの人を「個」と捉えるという意識が見られた。これは教室活動にさまざまなバックグラウンドを持った人が参加することで個としての認識が生まれたのだろう。「外国人」と「日本人」と考えられがちな多文化共生の解釈も個の違いを乗り越える「共生」の意識へと参加者の意識が変化したことはこの活動が共生社会の実現にもつながる活動であったと考えられる。また、留学生と掲示板でのやりとりを経験した参加者は自分自身の日本語について考えたり、相手が伝えたいことを考えたりしながら交流をしていた。そのため、やさしい日本語や伝えることについて考えるきっかけになったようである。これは他者との相互行為であるコミュニケーションについて考える機会につながるであろう。「偶然的参加者」は、直接的なかわりにはなかったものの留学生が話す日本語が上手であるという気づきがあったことが分かった。共生社会において、ことばが通じると思うことはそれぞれの意見を伝える方法の一つであり、外国人とも日本語でコミュニケーションができるということが分かることは非常に重要なことである。また、偶然に活動に参加したことで交流の意識が生まれていたことも共生社会の実現には重要であると考えられる。

インタビュー調査の分析から、このような社会につながる日本語活動は、留学生が日本社会にかかわる機会を持たせるだけではなく、この活動にかかわる人々に新たな意識を生ませたり、意識の変化を起こさせたりしていたことが分かった。従来は教室活動に参加する外部の人はボランティアで留学生だけが得をする活動であると考えられていたが、活動に参加する教室外の人々にとっても有益なことであることが明らかになった。また、それは決められた参加者だけではなく、偶然その場にいたことで参加の意思がなかった「偶然的参加者」にとっても有益な活動である。つまり、このような社会につながる日本語活動は参加する人、かかわる人、全ての人にとってメリットがある活動なのである。

このような結果から、今回の活動は、他者と共にある社会で日本語ということばを使って共に学ぶ場を創る活動であったといえるだろう。学習者だけではなく、教室活動にかかわる人々も学習者とかかわる過程において何らかの気づきや学びがあった。このような活動は、共生社会である日本社会にも良い影響を与える活動であることが示唆された。そして、このような活動ができる日本語教育は日本社会の共生に微力ながらもサポートすることができる可能性を秘めていることも証明できたのではないだろうか。

今回の調査からは、教室外の参加者からは否定的なコメントは見られなかった。しかしながら、このような活動に対して否定的に考えている人や活動に関心のない人もいるだろう。

今後は、そのような人たちにもインタビューを行い、更に多くの参加者の意識について明らかにしたいと考えている。

注

1. Web ブラウザで使えるオンライン掲示板のアプリケーションのこと。テキストを入力して文字を投稿したり、画像、音声、動画、手書きなど投稿したものを、参加者が共有し、閲覧したりコメントすることが可能である。
2. これらの活動は授業時間内では難しいことと多くの人に提言を聞いてもらうために授業時間外で実施した。大学でのカフェテリアでのプレゼンテーションは昼休みに、図書館でのプレゼンテーションは土曜日の午前中に行った。

参考文献

- 門倉正美・新矢麻紀子・野山広（2010）「地域日本語教育システム(1)コーディネーターと地域日本語教育専門家」日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』第2章, pp.19-31, ココ出版
- 木村哲也・宮崎里司（2010）「義務教育のあり方と日本語教育 教育基本法・教育免許制度」日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』第5章, pp.67-79, ココ出版
- 佐藤慎司・熊谷由理（編）（2011）『社会参加をめざす日本語教育』ひつじ書房
- 嶋ちはる（2015）「「社会」のなかに学習と学習者をとらえる」神吉宇一（編）『日本語教育学のデザイン その地と図を描く』, pp.123-144, 凡人社,
- 當作靖彦（2013）『NIPPON 3.0 の処方箋』講談社
- トムソン木下千尋（編）（2016）『人とつながり、世界とつながる日本語教育』くろしお出版
- 日本語教育学会（2017）「公益社団法人日本語教育学会の理念体系—使命・学会像・全体目標・2015-2019 年度事業計画」
- 日本語教育学会（2023）「日本語教育学の俯瞰図」の解説と活用法— 日本語教育と日本語教育研究の相互活性的なダイナミクスの促進をめざして —
- 日本語教育政策マスタープラン研究会『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』 ココ出版
- 野々口ちとせ(2010)「共生を目指す対話をどう築くか：他者と問題を共有し「自分たちの問題」として捉える過程」『日本語教育』144, pp.169-180
- 文化庁（2021）「日本語教育の参照枠報告」
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf\(2024.7.1\)](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf(2024.7.1))
- 細川英雄（2016）「市民性形成をめざす言語教育とは何か」細川英雄・尾辻恵美・マリ奥特ティ、マルチェッラ（編）『市民性形成とことばの教育』くろしお出版
- 細川英雄（2022）「ことばの教育は何をめざすか 共生社会のための Well-being」稲垣みどり・細川英雄・金泰明・杉本篤史（編）『共生社会のためのことばの教育 自由・幸福・対話・市民性』, pp.13-40, 明石書店
- 山田泉（2018）「「多文化共生社会再考」松尾慎編『多文化共生 人が変わる、社会を変える』, pp.3-50, 凡人社
- 横田隆志（2023）「共生を目指したオンライン授業での学習者と参加者の意識とその変化について—「社会につながる日本語教育」のインタビュー調査の分析から—」『北陸大学紀要』55, pp.253-267